

日本民間航空のパイオニア

十 後 藤 勇 吉

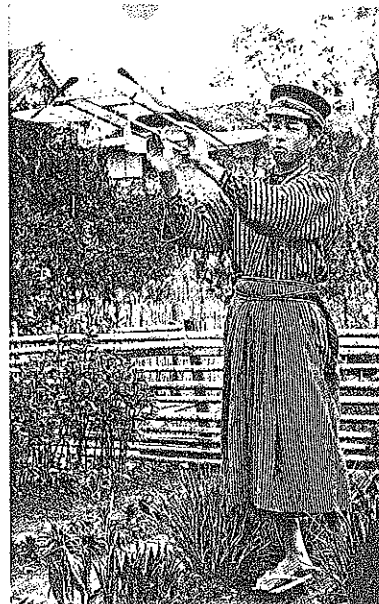


大正11年3月12日平和記念東京博覧会を記念し、各務原一代々木間の日本最初の旅客輸送飛行に成功。大正11年3月12日代々木練兵場で鈴木莊六中将らと撮影。中央勇吉。使用機川西K-3型。

日本で初めて飛行機にお客を乗せて飛ぶことに成功したのが後藤勇吉です。勇吉は、飛行機に乗りたいたいという自分の夢の実現に向かって常に新しいものを求め、工夫し続けたのです。

勇吉は、明治二十九年、延岡市に生まれました。少年時代からいろいろな機械に強く興味をもち、ひまさえあれば、自分で好きな物を作って遊んでいました。中学校に入学してからも、機械に対する関心はますます高まっていくばかりでした。

少年時代



明治43年、中学2年生の当時自作のゴム動力双発模型機を飛ばしている勇吉少年

した。びっくりした母親が、

「こんなにおそくまで何をしているのですか。そんなことはやめて勉強しなさい。」と注意すると、勇吉は、

「お母さん、これからの世の中は、いろいろなことが発達して、機械が大切な働きをするようになるのです。」

と言って、なおも製図を続けるのでした。

やがて、勇吉の心を強く動かすものが現れました。それは、飛行機でした。中学校を卒業するころには「将来りっぱな飛行家になりたい。」という希望が大きくふく

中学二年のときのことです。二階の部屋におそくまであかりがついているので、母親がふしぎに思っ行ってみると、勇吉がコンパスや三角定規を使って、熱心に製図にとりこんでいるので

らんできました。大正三年（十九歳）に上京した勇吉は、まず、機械について技術を身につけるため、自動車会社で一年間働くことにしました。朝は六時から、夜は八時ごろまで、どんなに仕事がつらい日でも、持ち前のねばり強さで、いっしょうけんめい働き、そして勉強も続けました。

その後も、飛行家への希望に燃えて勉強にはげみ、大正四年には有名な飛行家の助手になりました。大正五年に、その飛行家が日本人として初めて水上飛行機を作り水上飛行に挑戦しましたが、水面から浮き上がることはできませんでした。

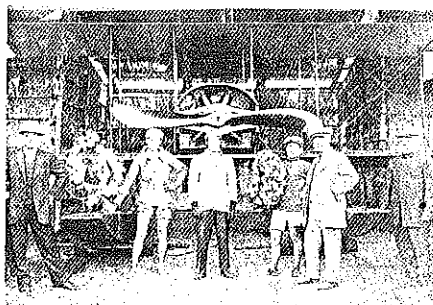
同じ年、ついに水上飛行機を手に入れた勇吉は、門川町の尾末の海岸おすえに格納庫かくのうこを建て、さっそく七月から練習を開始しました。

その頃の日本では、民間人の持つ飛行機といえは、勇吉の飛行機ただ一機だけだったので、驚きとめずらしさのため、たくさんの人々が見物にやって来ました。きびしい練習は毎日のようにくり返されましたが、飛行機は海面かつそうを滑走するだけで、ど

うしても空中に浮かび上がりませんでした。勇吉は、いろいろ原因を調べながら、工夫を重ねて練習を続けました。うまく飛ばないのは、もしかしたらフロート（浮舟）

が悪いのではないかと考え、大阪にベニヤ板を注文し、新しく作りなおしたこともありました。それでも、なかなかうまくいきませんでした。友達のアドバイスを参考にしながら、十分に滑走してから操縦管そうじゆうかんを引くようにした結果、飛行機は、みごとに空中に飛び上がったのです。

それはわずか三十メートルほどの直線飛行でしたが、勇吉にとって自分の力だけで空を飛ぶことができたという喜びと



大正5年11月2日尾来海岸で初めて直線飛行に成功したとき花輪をうけている。左端長尾彦四郎

感げきは、一生忘れることのできないすばらしいできごとでした。それから、勇吉は誰だれに教えられることもなく練習と工夫を重ね、ついに直線飛行に成功しました。

そして、旋回せんかいすることも自分の力のできるようになったのです。

しかし、五十メートル以上の高さで飛ぶことはできませんでした。

自分一人の練習に限界を感じた勇吉は、大正六年、三百人もの受験生にまじって飛行協会の練習生の試験を受け、三人だけ合格した練習生の一人になったのです。

りっぱな飛行家になった勇吉は、日本各地のいろいろな飛行競技大会で、すばらしい成績をおさめました。

そして、そのすぐれた飛行技術と企画力を生かして数多くの業績を残しました。

大正十二年の関東大震災のときは、東京の品川と静岡の間を郵便飛行し、六万通の郵便を運びました。勇吉によって素早く届けられた郵便で、どれほど多くの人々が勇気づけられたことでしょう。また、日本一周航路、大阪と上海間の試験飛行など、

数多くの航路も開拓しました。小さいときからの夢だった飛行家になって、多くの人々に夢と希望と勇気を与え続けた勇吉の一生は日本の航空発展の基礎をきずいた第一人者として、今でも人々に語りつがれています。

